

序 論

- 「それゆえ、我らは恐れない！！」(2節)。「恐れ無き人生」。これが、今日のメッセージの鍵の節である。
- 私たち人間の人生は、ある意味で、「恐れ」に取り囲まれていると言える。なぜなら、余りに多くのことが、否すべてが、Uncertain、不確定であり、明日は勿論、次の瞬間さえ分からないからである。
- 私事で恐縮ながら、今回の家内が経験した自動車事故では、奇跡的な守りがありましたが、人間的には一歩間違えていたら、彼女を始めとし、私たち家族全部の人生が変わってしまったかもしれない。
- 全く次の瞬間が分からない。9・11にしても、3・11にしても、熊本地震にしても、先日の北九州の豪雨による災害も、皆そうである。
- 世界に目をやっても、アメリカを見ても、日本を見ても、アジア諸国を見ても、ヨーロッパを見ても、一体世界はどこに進んでいくのか、どうなって行くのかと不安になる。
- それらが分からないとき、そして、ある日突然、災害に災難に襲われるとき、私たちは不安と「恐れ」に満たされる。
- 今日の聖書箇所、詩篇46篇の作者は、自らと、自らの属するコミュニティの経験を代表して、「恐れのない人生」を宣言し、証している。
- 今日は、同篇から、彼の証しする「恐れ無き人生」について学びたい。

本 論

Ⅰ. 私たちは、なぜ「恐れる」のか、その恐れ 배경に何があるのか？

A. まず、それは「天災」である。

1. 昔から、日本には、「怖い」ものの代表として、「地震、雷、火事、親父」と言う表現がある。前半の二つは天災である。
2. 先日、訪日した際、近年大地震を経験した二つの地域、福島と熊本を訪問する機会を頂いた。
 - (1)それぞれ、6年前と1年前のことであったが、言うまでもなく、それぞれに、今も大きな問題・課題を抱えて戦っている姿を見て来た。
 - (2)そんな中、つくづくそれらの震災の大きさと、それらが、人々に与えた打撃の大きさを感させられた。
 - (3)それは、これだけ科学技術が発達した現代でさえも、なお、底知れない自然界の持つ力と、その前における人間の無力さと、それゆえの人間のもつ恐れの実事であった。
3. この詩篇で言われていることも同じである。
 - (1)作者は、そのような天変地異を意識しながら、この詩を書いていた。
 - (2)2節：たとい、地は変わり、山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して、山々が揺れ動いても。
 - (3)この詩篇の作者が経験していた「恐れなき人生」とは、正にこのような天災のど真ん中でのものであった。

B. 次は、「人災」である。

1. 6節：国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ。
2. これは言うまでもなく、直接的には、諸国間の争い、戦争状態のことである。
3. 「人類の歴史は、戦争の歴史である」と言われる。人類の歴史において、戦争の無かった時代はないと言えるほどに、いつも世界のどこかで人類は戦争を経験してきた。
4. なぜなら、戦争の背景・原因には、政治的、経済的、様々な外的要因もあるものの、その奥には、必ず自己中心な罪と言う根本原因があるからである。
5. その意味で、人類最初の戦争は、カインとアベルの兄弟間の戦争だったと言っても過言ではないであろう。
6. しかし、そのたびに、人類は戦争で苦しんできた。
 - (1)それは、爆撃による死傷などの直接的悲劇だけではない。

- (2)現在、世界の多くの場所に見られる、飢饉や食糧不足と言われる問題でさえ、実は天災による影響もさることながら、戦争の結果だとも言われている。
7. 戦争の真の悲惨さは、経験した人々だけが知っているのだろうが、直接体験の有無にかかわらず、戦争は、その悲劇的・破壊的結果ゆえに繰り返してはならない人災である。
 8. 戦争とその悲劇は人災である。「人災」の中には、交通事故を始めとする様々な事故や、病気の一部も入るであろう。最近テレビジャパンでも再び取り上げていた「苛め」の悲劇。これもまた人災である。私たちはみな、このような人災に囲まれて生きている。
 9. 詩篇46篇の作者は、これらの「人災」の真ただ中で、「恐れ」に押しつぶされそうになってもおかしくない状況で、「私は恐れない」と言ったのである。

II. それでは、私たちは、どのようにして、これらの天災・人災のただなかで、「恐れ」に捕らわれることなく、逆に、それに打ち勝って、「しかし、私は恐れない」と、この詩篇の作者のように生きることができるのか？

A. 第一に、それは、あなたの神様に対する「信仰」である。

1. 詩篇46篇の作者は、神様に対する彼の信仰を、その冒頭で、まず、それを表した。
 - (1)即ち、彼の詩篇は、ダラダラとした、あるいは、泣き言のような苦情や事情説明の文章では始まらなかった。
 - (2)それは、むしろ、彼が、神様とはどんなお方だと信じているかの明瞭な「信仰告白」と宣言始まった。彼は言った。
 - (3)即ち、1節「神は我らの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」であった。
 - 避け所：私たちは、皆怖い時、危ないとき、悲しい時、逃げ込む場所が必要である。
 - それの要らない人はいない。人間的にどんなに強い人でも。
 - 私の忘れられない思い出がある。私の尊敬する牧師、立派な教団の創設者であった先生の息子が、その父親のことを語った時のことである。その父親と言う方は、天皇と呼ばれるほどに、強いリーダーであり、その強さは、教団外の人々にも認められるほどのものであった。しかし、その息子が言ったことは、私が父の愛唱讃美歌が何かを発見したときに驚いたと言う。彼は言った。父の愛唱歌はきっとその性格から何か勇ましい歌だと思っていたら、Jesus, Lover of my Soul(わが魂を愛するイエスよ)だった。それは、勇ましさより、イエス様との関係、信仰の内面を謳う歌であった。
 - それはこのように謳う：Jesus, Lover of my Soul, let me to Thy bosom fly while the nearer waters roll, while the tempest still is high, Hide me, O my Savior, hide till the storm of life is past; safe into the haven guide; Oh, receive my soul at last. (Charles Wesley)
 - それは、人生の嵐の中で、イエス様を「避け所」Refuge, Hiding Place 隠れ家とする人生である。
 - 力：耐える力、戦う力は、そこから生まれ出て来る。
 - そこにある助け：そのような「助け」は、余りに恐れ多く、遠くにあるものと感じやすい。近づき難い遠いところから呼ばなければならないと思ひ易い。
 - 即ち、確かに、それは力強い助けかもしれないが、そう簡単には手に入らない、いつも Available ではないと思うので、すぐに中々求めない。
 - しかし、この詩篇の作者は言う。それは、遠くではない。あなたのすぐそばにある。そこにある助けだと。
 - 昔そばにあった質屋の看板：遠くの親戚より、近くのハタ質店
 - これまで何回もあったこと：何かを失くしたと思って、さんざん探したがまだ見つからないとき、家内がよく言う。「お父さん。お祈りしたの?」。私たちは、つい祈るのを忘れる。即ち、いつもそこにある助けとしての神様を忘れやすい。すぐに祈って、また探し始めると、必ずと言って良いほど、不思議に見つかる。

2. このようなお方として、神様を信じる信仰を、初めから終わりまで、変わらずに貫き続けること。
 - (1)先日も触れたが、それに失敗したのが、ペテロが水の上を歩いた時である。(マタイ 14 章 22-33 節)
 - (2)ペテロがイエス様を見つめ、信じていたとき、彼は水の上を歩けた。
 - (3)しかし、彼が、風を見たとき、即ち、イエスより、天災と人災を見た時、彼は、信仰を失い、恐れに捕らえられたのである。
- B. 次に、恐れ無き人生に必要なことは、ご聖霊による神様との内面的、個人的な交わりである。
 1. 4 節「川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。神はその中にいまし、その都は揺るがない。」
 2. この川とはどんな川か？
 - (1)この川を、ヒゼキヤ王がアッシリヤとの戦いのときに、城壁の外のギホンの泉から、城壁内のシロアムの池に水を引き込んだときの地下水道だと言う人もいる。
 - (2)しかし、これ以外に、川らしきものはエルサレムの都には無かった。
 - (3)むしろ、これは、実際の川と言うより、黙示録にも出て来るが、象徴的、霊的なものとして解釈するべきである。
 - (4)イエス様は言われた。ヨハネ 7 章 38、39 節「私を信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。これは、イエスを信じる者が後になって受ける御霊のことを言われたのである」。
 - (5)即ち、この川とは、神様の御住まいである私たちの心の中に流れるご聖霊である。
 - (6)それは、間断なく、私たちの心の中を流れるご聖霊との交わりを意味している。
 - (7)それは、正に、前述の某教団の創設者であった牧師のことを思い出して頂きたい。彼は、太平洋戦争中、その信仰ゆえに、捕らえられ、投獄、2 年間の独房生活。戦後教団創設。世界中を旅行しながら、海外宣教にも力を入れ、他の教団が目を見張るような発展。64 才?で、心筋梗塞で天に帰る。壮絶な人生。言うまでもなく、その生涯は波乱万丈であり、戦いがあり、不安や、恐れも一杯あったであろう。しかし、そのような彼を支えたのは、先に指摘した彼の愛唱歌 Jesus, Lover of my soul わが魂を愛するイエスよ、の歌に表れているイエス様との内なる密かな愛の交わりであった。
 3. 恐れのない生涯に必要なものは、このような聖霊によるイエス様との絶えざる交わりの流れである。これなくして、私たちは恐れに打ち勝つ道はない。
- C. 最後に、詩篇 46 篇が教えている、恐れのない生涯に必要なものは、「自分の業を休む、やめる」ことである。
 1. 8-10 節、特に 10 節に目を留めたい：「やめよ。私こそ神であることを知れ。・・・」
 2. ここで言われていることは何か？
 - (1)戦うのは、神であることを認識すること、肝に銘じること
 - (2)私たちは、戦うのを止めることを実践すること
 3. これらは聖書の中で何度も繰り返されているメッセージであるが、
 - (1)その代表的な例は、出エジプト 14 章に記されている。
 - 紅海を目の前に行くてを阻まれ、後ろからはエジプト軍が迫って来ると言う絶対絶命の危機で神様が言われたことであり、イスラエルの人々が経験したことであった。
 - 13-14 節：恐れてはならない。しっかりと立って、今日、あなた方のために行われる主の救いを見なさい。・・・主があなたがたのために戦われる。あなた方は黙っていなければならない。」
 - (2)詩篇 62 篇 1 節も言う：私の魂は黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。
 - (3)新約聖書のヘブル書 4 章 10 節では、この同じメッセージがこのように言われている。「神の安息に入った者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずである。」

- (4) 自分の業を休む、自分のわざを止めるとは、自分が何もしなくなることではない。
- (5) 神の声を聞こうともせず、神のご計画や御心に心を向けることもせず、自分の計画、自分の願望達成のために進むことであり、
- (6) それゆえ、神の力により頼むより、自分の力や、友人や、周囲の「人」の助けに依存することである。
4. 自分の計画で、自分の力で生きている間は、私たちは永遠に平安と不安のシーソーゲームである。事がうまくいっている間は、平安がっても、物事が問題にぶつかるたびに不安になり、恐れる。
5. 恐れ無き人生のためには、自分の業を止めること、神のなされる救いを待つ姿勢が必要である。
- (1) それをしないでいつまでも、不信者時代と同じように、自分の業を続けるから、神様の救い、素晴らしさを見ること、知ることができない。
- (2) 詩篇 46 篇の作者は言う。「やめよ。(そして)私こそ神であることを知れ」(10)。

結 論

- 今日学んだことは、恐れのない生涯に必要なことは：
 1. 明確かつ継続的信仰宣言
 2. ご聖霊によるイエス様・神様との絶えざる親密な内的交わり
 3. 自分の業を止めること(自分の計画と願望に生きる、自分の力でそれを完遂しようとするのを止め、神様が何をなさるかを見ようとする人生
- これをするとき、7、11 節にある「神は我らと共におられる」という約束が、単なる希望、むなし Assumption や期待ではなく、私たちの生活と人生の中で経験する現実・事実となる。ハレルヤ